

大宴会の譬え

——ルカ 14:15-24 の釈義的研究——

嶺 重 淑

序

イエスの譬えとしてよく知られている「大宴会（盛大な晩餐）の譬え」は、新約聖書のルカ 14:15-24 とマタイ 22:1-14 に伝承されている。双方の記事は、ある男が宴会を催し、宴会が始まる直前に僕を遣わすが、招かれていた人々が次々にその招待を断ったため、彼は怒って、代わりに別の人々を招いて宴席を満たすという大筋においては一致している。その一方で、両者は明らかに異なる文脈に置かれており¹、また多くの点で相違している²。ここではルカ版の譬えに注目し、この譬えの本来の意味とともにルカにおける意味について考察していくことにする³。

1 ルカのテキストが、エルサレム途上においてイエスがファリサイ派の議員に招かれた宴会の場面に位置づけられているのに対し、マタイのテキストは、エルサレム入場後にイエスが語った一連の教えの中に組み込まれている。

2 ルカ版では、ある人が盛大な晩餐を催し、一人の僕を最初に招いた人々のところに一度だけ遣わすのに対し、マタイ版においては、王が王子のために婚宴を催し、最初に招いた人々のところに家来たち（複数）を二度にわたって遣わしている。またマタイ版では、招待を断った人々はその遣わされた家来たちを殺害し、王はその報復として軍隊を送って彼らを殺し、その町を焼き払ったとされるが（70年のエルサレム陥落を暗示）、ルカにはそのような記述はない。またルカ版では、その後二度にわたって別の人々が招かれるが、マタイでは一度のみである。さらにマタイ版では、婚宴の場で婚礼の服を着ていない客を追い出すように王が命じるエピソードが加えられている。

3 この譬えはトマス福音書（語録 64）にも含まれており、大筋においてルカ福音書の譬えに並行しているが、そこに登場する4人の招待客の断りの理由は、借金の取り立て、家の購入、婚宴の催し、村の購入というように、すべて金銭に直接関わる行為に関係しており、また最後は、買主や商人は御国に入ることはいらないという旨の適用句で結ば

1. テキストの分析

1.1. テキスト（私訳）

14:15 すると、食事の席についていた客の一人は、これを聞いて彼（イエス）に、「神の国で食事をする人は、なんと幸いなのでしょう」と言った。¹⁶ ここで、イエスは彼に言った。「ある人が大宴会を催そうとし、大勢の人を招いた。¹⁷ そして宴会の時刻になったので、僕を送り、招待客たちに、『すでに準備ができましたから、おいでください』と言わせた。¹⁸ すると皆、異口同音に断り始めた。最初の人には、『畑を買ったので、見に行かねばなりません。どうか、失礼させてください』と言った。¹⁹ 別の人には、『牛を五つがい買ったので、それを調べに行くところです。どうか、失礼させてください』と言った。²⁰ また別の人には、『妻を迎えたいばかりなので、行けません』と言った。²¹ 僕が帰って来て、このことを主人に報告すると、家の主人は怒って彼に言った。『急いで町の大通りや小路に出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい。』²² しばらくして、僕は、『御主人様、あなたが命じられたことは実行いたしました。が、まだ余地があります』と言った。²³ すると主人は僕に言った。『通りや小道に出て行き、無理やりにでも人々を連れて来て、私の家を一杯にしなさい。』²⁴ 言っておくが、あの招かれた人たちの誰一人として、私の宴会に与る者はいないであろう。』

1.2. ルカ 14 章の全体構成

「大宴会の譬え」を含むルカ 14 章は、イエスのエルサレムへの旅について記された、ルカ福音書の中央部（9:51-19:27）の中程に位置しているが、1-24 節については、イエスがあるファリサイ派の人物から招かれた宴会の文脈に置かれている（14:1）⁴。この箇所は、①安息日における水種の人の癒し（V. 1-6）、

れている。

4 ルカ 14:1-24 の文学的統一性については、W. Braun, *Feasting and Social Rhetoric in*

②宴会に招かれた人への教訓 (V. 7-11)、③宴会に招いた人への教訓 (V. 12-14)、そして④大宴会の譬え (V. 15-24) という4つの部分から構成されているが、最後の④大宴会の譬えがこの箇所全体の頂点に位置している。

これら4つの段落のうち、宴会に招かれた人と招く人に対する教訓を述べた②と③については、内容的に対応しているのみならず、形式的にも同様の構造をもっている⁵。また、④の大宴会の譬えは、直前の③の貧しい者たちを宴会に招くようにとの教訓の例話として機能し、また逆に、後者は前者の導入として機能している⁶。

今回取り上げる「大宴会の譬え」のテキスト (V. 15-24) については、内容から以下のように区分され、δεῖπνον (宴会) と καλέω (招く) という2つのキーワードが譬え話全体 (V. 16-24) を枠付けている。

- ・ 譬えへの導入 (V. 15)
- ・ 宴会への招待と僕の派遣 (V. 16-17)
- ・ 招待者の断りとその理由 (V. 18-20)

Luke 14 (MSSNTS 85), Cambridge 1995 を参照。ルカ福音書における饗宴談話 (ルカ 5:29-32; 7:36-50; 11:37-54 参照) の原型は、古代ギリシア・ローマの饗宴に見出される。対話の枠としての饗宴は、プラトンやクセノフォン以来の古代の教育的伝統の一要素であるが、ルカの饗宴は、対話よりもイエスの教えの場としての意味合いを強くもっている点において際立っている。ルカの饗宴については、J. Ernst, *Gastmahlgespräche: Lk 14, 1-24*, in: R. Schnackenburg u.a. (Hg.), *Die Kirche des Anfangs* (FS H. Schürmann), Freiburg/Basel/Wien 1978, pp. 57-62; J. Bolyki, *Jesu Tischgemeinschaften* (WUNT II/96), Tübingen 1998; D. E. Smith, *Table Fellowship as a Literary Motif in the Gospel of Luke*, *JBL* 106, 1978, pp. 613-638; X. De. Meeûs, *Composition de Lc., XIV et genre symposiaque*, *ETHL* 37, 1961, pp. 847-870; E. S. Steele, *Luke 11, 37-54 - A Modified Hellenistic Symposium?*, *JBL* 103, 1984, pp. 379-394 等を参照。

5 すなわち両者とも、導入句 (ἐλέγεν δὲ... [V. 7/V. 12a]) の後に、否定的 (ὅταν... μὴ ποτε [V. 8/V. 12b])、そして肯定的 (ἀλλ' ὅταν... [V. 10/V. 13]) 勧告が続き、最後に終末論的な言述 ([V. 11/V. 14]) によって結ばれている。

6 双方の段落は、何より至福の言葉 (μακάριος...: V. 14/V. 15) によって結合されており、さらに、宴会の催し (ποιεῖν δεῖπνον: V. 12/V. 16)、招かれるべき人々 (πτωχοὺς, ἀναπειρούς, χωλοὺς, τυφλοὺς: V. 13/V. 21) 等の要素を共有している。もっとも、12-14 節では、どんな人物を宴会に招くべきかという倫理的勧告が主題になっているのに対し、15-24 節の譬えでは、神の国の食事への招き (終末論的使信) が問題になっていることから、両者の関係を必要以上に強調すべきではない。

- ・ 僕の報告と主人の怒り、再度にわたる招待 (V. 21-23)
- ・ 結語 (V. 24)

1.3. ルカ 14:15-24 の伝承と編集

一連の宴会の場面を構成するルカ 14:1-24 の枠組みは、導入の 14:1 が明らかにルカの編集句と見なされることから⁷、全体としてルカの構成と考えられる。これに加えて、各段落を導入する 7 節、12 節 a、15 節の各節も全体としてルカの編集句と見なしうることから⁸、ルカは恐らく、様々な資料に由来する⁹ これら 4 つの段落を「宴会」というキーワードによって結びつけ、このルカ 14:1-24 の段落全体を構成したのであろう¹⁰。

前述したように、今回扱うルカ 14:15-24 とマタイ 22:1-10 は並行しており、資料としてはまず、マタイとルカの共通資料 (Q 資料) が想定される¹¹。しか

7 冒頭の καὶ ἐγένετο (ἐγένετο δὲ) は 41 回の共観福音書の用例中 33 回がルカ福音書に用いられ、不定詞を伴う ἐν τῷ... は、マタイに 3 回、マルコに 2 回用いられているのに対し、ルカ文書には 39 回 (ルカ=32/使=7) 用いられている。ὁ ἄρχων の複数形 (τῶν ἀρχόντων) は、新約聖書にはヨハネ福音書に 3 回用いられている他はすべてルカ文書に出てくる (ルカ=4/使=5)。καὶ αὐτός/καὶ αὐτοί という表現は、福音書の 39 回の用例中、34 回はルカ福音書に用いられ、さらに παρατηρέω という動詞は、6 回の新約用例中 4 回がルカ文書に含まれている。これらのことに加えて、福音書記者の中ではルカのみが、イエスがファリサイ派の人物に食事に招かれる場面を伝えている (ルカ 7:36; 11:37 を参照)。

8 7 節の ἔλεγεν δὲ πρὸς... παραβολήν, ...λέγων πρὸς αὐτούς という表現はルカに特徴的である。これについては、J. Jeremias, *Die Sprache des Lukasevangeliums* (KEK Sonderband), Göttingen 1980, pp. 33, 67-70, 124, 215 を参照。同様に 12 節 a の ἔλεγεν δὲ καὶ... という表現も明らかにルカ的である (Jeremias, op. cit., pp. 33, 78-79 参照)。なお 15 節については注 15 を参照。

9 2-6 節、8-11 節、12 節 b-14 節はそれぞれ別個にルカ固有の資料 (ルカ特殊資料) に由来するのであろう (16-24 節については後述)。

10 F. Bovon, *Das Evangelium nach Lukas II* (EKK III/2), Zürich/Neukirchen-Vluyn 1996, p. 505 や G. Eichholz, *Gleichnisse der Evangelien. Form, Überlieferung, Auslegung*, Neukirchen-Vluyn 1971, p. 132 等、多くの研究者がそのように考えている。その一方で、例えば F. Hahn, *Das Gleichnis von der Einladung zum Festmahl*, in O. Böcher/K. Haacker (Hg.), *Verborum Veritas* (FS G. Stählin), Wuppertal 1970, p. 74 は、ルカ 14:1-24 の 4 つの段落はすでにルカ以前に結合していたと主張している。

11 例えば、S. Schulz, *Q. Die Spruchquelle der Evangelisten*, Zürich 1972, p. 398 や H. Weder, *Das Gleichnisse Jesu als Metaphern. Traditions- und redaktionsgeschichtliche Analysen und*

し、両者間に存在する相違点のすべてを両福音書記者に編集作業に帰すことは難しいことから、双方のテキストは（元来は一つの口伝であっても）Q 資料に由来するのではなく、二つの異なる資料によって伝承されたとする研究者も多い¹²。しかしその一方で、両テキストは物語の大筋において一致していることも確かであり、また共通の表現も多く確認できることから、むしろこれら二つのテキストは、それぞれマタイ版 Q 資料、ルカ版 Q 資料に遡ると見なすべきであろう¹³。

マタイの並行箇所については、譬え冒頭の「天の国は～」(マタ 22:2) という表現をはじめ、比較的多くの編集句が確認されるのに対し¹⁴、ルカ版テキストについては、あまり編集部分は見出されない。それでも、冒頭の 15 節は全体としてルカによる編集的構成と見なしうる¹⁵。僕の報告と主人の二度目の招待について述べる 21 節そのものは伝承に由来すると考えられるが、ここで招かれるべき人々として挙げられている「貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人」というリストについては、前段落のリスト (14:13)

Interpretationen (FRLANT 120), Göttingen 1990, pp. 177-178; John S. Kloppenborg, *Q Parallels: Synopsis, Critical Notes & Concordance*, Sonoma, California 1988, p. 166 は、両テキストの背景に Q 資料を想定している。

12 例えば、U. ルツ・小河陽訳『マタイによる福音書 (18-25 章)』(EKK 新約聖書注解 I / 3)、教文館、2004 年、282 頁や Eichholz, op. cit., pp. 127-129; E. Linnemann, *Überlegungen zur Parabel vom großen Abendmahl* Lc 14, 15-24/Mt 22:1-14, ZNW 51, 1960, p. 247 等がそのように考えている。因みに、古代以来、これら二つのテキストの背景には、イエスが異なる機会に語った二つの譬えがあると考えられてきた。

13 F. W. Horn, *Glaube und Handeln in der Theologie des Lukas*, Göttingen 1983, p. 184 も同意見。

14 マタイの編集箇所については、ルツ、前掲書、282-283 頁を参照。

15 ἀκούσας/ἀκούσαντες... ταῦτα という表現は新約にはルカ 7:9; 14:15; 18:23; 使 11:18 にしか見られないことから ἀκούσας... ταῦτα は明らかにルカ的である。さらに「神の国で食事をする」は内容的にルカ 13:29 の「神の国で宴会の席に着く」に近い。確かに言語的な観点からは、15 節全体をルカの編集句と見なすことは難しく、むしろこれを伝承に帰する研究者も少なくないが (例えば、I. H. Marshall, *The Gospel of Luke. A Commentary on the Greek Text* (NIGTC), Exeter 1978, p. 587)、ブルトマンも指摘しているように (ブルトマン著・加山宏路訳『共観福音書伝承史 I』(ブルトマン著作集 1)、新教出版社、1983 年、185-186、330 頁)、ルカが伝承された至福の言葉を編集的に構成したということは十分に考えられる。

に（順不同ではあるが）一致していることから¹⁶、ルカの編集句と考えられる¹⁷。また、三度目の招待について述べる 22-23 節は、最初の招待客の代わりに別の客を招こうとする二度目の招待とは異なり、宴会の席を満たすことに焦点が移っており、二次的に付加されたものと考えられる¹⁸。最初の招待客の宴会の席からの完全な締め出しについて述べる結びの 24 節は直前の 22-23 節の内容に適合しているが、21 節までの内容には必ずしも適合していないことから¹⁹、元来の譬えに含まれていたとは考えにくく、やはり二次的に付加されたものであろう²⁰。ここにはルカ的な表現が含まれており²¹、また、前述したように、14:1-24 の枠組みそのものがルカの編集によることを勧案すれば、まったくのルカの創作によるものではないにしても、ルカがこの結びを（部分的であつたにしろ）編集的に構成したことは十分に考えられる²²。また、この譬え

16 さらに、ルカ福音書の至福の言葉は貧者たちに向けられ（6:20）、イエスのナザレ説教（4:16 以下）においては、貧者への福音告知と目の見えない人への視力の回復が約束され、7:22（マタ 11:5 並行）には、「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、…貧しい人は福音を告げ知らされている」と記されている。

17 21 節冒頭の παραγινόμενος はルカに特徴的な用語であり、新約用例 36 回中 28 回がルカ文書（ルカ=8/使=20）に用いられている。21 節 b の εἰσάγω もルカ好みの用語であり、新約用例 11 回中 9 回がルカ文書（ルカ=3/使=6）に用いられている。因みに Bovon, op. cit., p. 507 や J. A. Fitzmyer, *The Gospel according to Luke X-XXIV* (AB 28A), New York 1985, p. 1052 は、この二度目の派遣の記述全体（V. 21b）をルカの編集句と見なしている。

18 J. エレミアス著・善野碩之助訳『イエスの譬え』、新教出版社、1969 年、65 頁や Schulz, op. cit., pp. 396-397 を参照。一方で Linnemann, op. cit., p. 248 はこの 22-23 節を譬えに不可欠な要素と見なしているが、これは最初の二人の招待客の拒絶（18-19 節）を暫定的と見なす彼女自身の理解に基づいている。

19 常識的に考えれば、最初の招待客たちは自らの意志で招きを断ったわけであるから、主人がわざわざ他の客を招いて宴席を満たさなくても、彼らが宴会の場に来る可能性はないはずである。

20 その一方で、24 節が二次的であるとしても、元来の譬えに何らかの結びの句が付されていた可能性は否定できないであろう。

21 「夫」以外の意で用いられる ἀνὴρ は、特にルカ的な言葉であり、新約用例 127 回中、116 回がルカ文書（ルカ=23/使=93）に用いられている。また、本来の「味わう」という意味の γεύομαι に目的語属格が用いられているのは、新約ではルカ 14:24 と使 23:14 のみである。

22 三好迪「ルカ 14:15-24 大宴会のたとえ」『新約学研究』（日本新約学会）第 21 号、1993 年、4 頁や W. Schmithals, *Das Evangelium nach Lukas* (ZBK NT 3.1), Zürich 1980, p.

の起源については、多くの研究者は史的イエスに遡ると考えている²³。

2. テキストの釈義的検討

2.1. 譬えへの導入 (V. 15)

この段落は、ファリサイ派の議員宅でなされていた会食 (14:1) に出席していたある人物の言葉によって導入される。彼は、貧者らを食卓に招く人々は幸いであり、義人が復活する際に彼らに報いが与えられるという直前のイエスの至福の言葉 (14:14) を聞いて、先にイエスが語った終末における神の国の宴会 (ルカ 13:28-29)²⁴ を連想し、同様に至福の言葉の形式を用いて、「神の国で食事をする人は、何と幸いなのでしょう」と語るのである。このようにここでは、地上での宴会から神の国の宴会へ主題が移行している。

2.2. 宴会への招待と僕の派遣 (V. 16-17)

この客の言葉を受けて、イエスは譬えを語り始めるが、その譬えでは、食事そのものではなく、食事への招待と招待客の振舞いが問題にされている。ある人が盛大な宴会を計画し、多くの客を招き、宴会の時間になったので、僕を招待客のところに遣わして、準備が出来たのでお出でくださいと言わせる (エス 6:14 参照)²⁵。文脈からも明らかなように、招待客たちは、すでに事前に招待を受けていたことが前提とされている。

2.3. 招待者の断りとその理由 (V. 18-20)

しかし、招待客たちは皆、宴会への出席を断り始める²⁶。彼らはあらかじめ

160 は、24 節全体をルカの編集句と見なしている。

23 ルツ、前掲書、185 頁参照。

24 神の国を宴会になぞらえるのは旧約以来の伝統である (イザ 25:6-8; 55:1-2; 65:13-14; 黙 19:9 他参照)。

25 エレミアス、前掲書、194 頁によると「食事の時間に招待を反復するのは、エルサレムの上流階級で行なわれていた特別な礼儀である」。

26 3 人の招待客に付せられた ὁ πρῶτος...καὶ ἕτερος...καὶ ἕτερος... (V. 18-20) という表

招待されていたわけだから、これは通常は考えられないことである。最初の人物は畑を購入したので、見に行かねばならないと言い、二人目の人物は、牛を五くびき買ったので、それを調べに行くと言ふ。この二人の招待客の断りの言葉は同様の形式で構成されており、両者とも、ものを購入したこと (ἀγοράζω) を理由に、(表面上は) 丁重に招きを断っている²⁷。それに対して三人目の人物は、妻を娶ったばかりなので、(彼女を一人残しておくわけにはいかず) 出席できませんと淡々と事情を述べつつ断っており、そこには謝罪の言葉は含まれていない²⁸。3人の弁解はいずれも、(所有物に関わる) 世俗的な事情のために招待を受け入れられないと表明しており、いずれにしても口実に過ぎないが、特に三人目の人物の無礼な態度は、招きが完全に拒絶されたことを強調している²⁹。

2.4. 僕の報告と主人の怒り、再度にわたる招待 (V. 21-23)

やがて、僕が帰って来て、招待客から拒絶されたことを主人に伝える。すると、主人は怒って、急いで大通りや小路に出て行って、「貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人」らの社会的弱者を連れて来るように僕に命じる³⁰。

現形式は、招待客は彼ら3人だけではなかったことを示している。

27 Linnemann, op. cit., p. 250 は、最初の二人の言い訳は招待に対する完全な拒絶ではなく、行くには行くが——商取引は通常一日の労働が終わった後になされるので——宴会の開始時には間に合わないということを意味しているとし、結果的に、たとえ来るにしても遅れば意味がないということを示すことによって、今決断しないという終末論的な要求がここでは強調されていると主張している。しかし、この見解は推測の域を出ていない。

28 注解者の中には、結婚後一年間は軍務を免れるという律法の規定 (申 20:7; 24:5) を引き合いに出す者もあるが、このことは食事の断りの理由にはなりえない。

29 これに対し、W. Grundmann, *Das Evangelium nach Lukas* (ThHK 3), Berlin 1961, p. 299 や Eichholz, op. cit., p. 130 は、三人目の弁解も単なるバリエーションに過ぎず、特に無礼な態度は表現されていないと主張している。

30 このリストに挙げられている人々が、当時のユダヤ社会において、いかに差別されていたかということは、以下の箇所からも確認できる。サム下 5:8 によると、目や足の不自由な者は神殿に入ることはできず、レビ 21:17 には、目や足の不自由な者等、障害のある者は、神に食物をささげる務めをしてはならず、祭壇に近づいてはならないと規

しばらくして、これらの人々が連れて来られてもなお空席が残っていると僕から知らされた主人は、今度は町の外の通りや小道に出て行って、「無理やりにでも」³¹ 人を引っ張って来て、家の中を一杯にするように命じる。物語そのものはここで終了し、三度目の招待の結果や実際の宴会の様子についてはまったく触れられていない。その意味でも、人を招くという行為そのものよりも、むしろ、とにかく客席を満杯にすることが目的となっている。

この譬えには3組の招待客は登場しているが、伝統的に、最初の招待客は「敬虔なユダヤ人」、第二の招待客は「徴税人と罪人」、最後に招かれた人々は「異邦人」を暗示していると寓喩的・救済史的に解釈されてきた³²。イエスの譬えは本来、寓話ではないので、個々の要素を単純に対応させる寓喩的解釈は避けるべきであるが³³、それでも、このような対応関係にある程度の蓋然性は認められるであろう。もっとも、最初の招待客は「ユダヤ人指導者層」、第二の招待客は「社会的弱者」一般と見なす方が適切であるように思える。

2.5. 結語 (V. 24)

段落の最後で、「言っておくが」という強調の表現によって、最初に招かれた者は誰も宴会に参加して食事を味わうことはないと言われ、招待を断った客たちは神の国の宴席に着くことはできないということが明らかにされる。前述したように、この結語は最初の招待客の締め出しについてのみ言及されており、後から宴会に招かれた人々の反応については触れられておらず、その意味

定されている。またクムラン教団においては、目や足の不自由な者等、障害のある人々は神の集会に参加できず（「会衆規定」2:2:3-10）、戦争に参加することも許されなかった（「戦いの書」7:4-5）。

31 「無理やりにでも」という表現は、とにかく客席を満杯にしようとする主人の強い意志を示しているが、解釈史においては、これがしばしば強引な伝道活動を正当化するものとして誤解されてきた。

32 A. Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu II*, Tübingen 1910, pp. 416-417 参照。

33 確かに、M. Wolter, *Das Lukasevangelium* (HNT 5), Tübingen 2008, p. 509 が指摘しているように、この譬えの主役は主人と第一の招待客であり、第二、第三の招待客はほとんど主体的な役割を演じておらず、脇役に過ぎないという点を考えると、三者を単純に並列すべきではないかもしれない。

でも、譬えそのものの内容とは合致していない。

問題となるのは、この結語を述べたのは譬えに登場する主人か、あるいはイエスかという点である³⁴。確かに、「最初の招待客たちは私の食事を味わうことはない」という趣旨の発言は、譬えの中の主人が発するにふさわしい言葉である。しかしながら、24 節で聞き手の人称が単数形 (τὸν δοῦλον) から複数形 (ὑμῖν) に変化していることは、聞き手が譬えの中の僕 (単数) から譬えの聴衆 (複数) に変化していることを示している³⁵。その意味では、このルカの文脈においては、譬えを語り終えたイエスが聴衆に向かってこの結びの言葉を語ったと解する方が自然であるように思える³⁶。さらに、「言うておくが」(λέγω γὰρ ὑμῖν) という言い回しはイエスに特徴的なものであり、特に譬えの末尾にイエスの適用句として用いられている (ルカ 11:8; 15:7, 10)。そのような意味では、この言葉の語り手は「譬えの中の主人」であるだけでなく、半ば「イエス」に移行していると見なすことができる³⁷。より厳密に言うなら、元来の譬えにおける結語の語り手は譬えの中の主人であったが、それがルカの文脈においてはイエスに変化していったのであろう³⁸。

34 24 節の言葉の語り手については、譬えの中の主人と見なす見解も (E. Linnemann, *Gleichnisse Jesu. Einführung und Auslegung*, Göttingen 1966, p. 96 他)、イエスと見なす見解も (例えば G. Schneider, *Das Evangelium nach Lukas. Kapitel 11–24* (ÖTK 3/1), Würzburg²1984, p. 319 他) 見られる。

35 Linnemann, op. cit., p. 96 は、ここでの主体は譬えの中の主人であるが、その対象はもはや僕ではなく、聴衆全体に移行しており、彼はいわば舞台から聴衆に向かって語っていると主張している。

36 確かに「私の食事」という表現は、この文脈におけるイエスの言葉としてはふさわしくないが、ルカのイエスはルカ 22:30 でもこの表現を用いている。

37 J. Nolland, *Luke 9, 21–18:34* (WBC 35B), Dallas 1993, p. 758 を参照。事実、比較的多くの研究者 (Bovon, op. cit., pp. 513, 515 他) は、この言葉の語り手に関して両者の要素 (両義性) を認めている。

38 エレミヤス、前掲書、195 頁も、ルカの文脈では 24 節はイエスの言葉であるが、元来は家の主人の言葉であったらうとしている。なお、Weder, op. cit., pp. 184, 192 が指摘しているように、21 節以降、イエスを意味しうる κύριος という語が (ルカにおいてのみ) 三度にわたって招待者の主人に対して用いられていることも、このことに符合している。

3. テキストの中心的意味

ここまで述べてきたことを踏まえて、以下、テキストの中心的意味について考察していくことにするが、史的イエスの譬えから現行のルカのテキストに至る伝承の経緯を確認しつつ、述べていきたい。

まず、史的イエスに遡ると想定される元来の譬えは、主人が宴会を催す場面に始まり（16 節）、最初の招待客に宴会への出席を断られた主人が、怒って代わりの人々を招くように僕に指示する 21 節の場面で終わっていたと考えられる。それゆえ元来の譬えにおいては、宴会を催した主人は、たとえ、当初予定した招待客に断られても次の人を招き、いずれにせよ、宴会は決行される（＝救いは実行される）という点が強調されている。そのような意味でも、この段階の譬えの主演は招待客ではなく主人であり³⁹、また、招きを断った最初の客たちへの非難は特に強調されていない。確かに物語そのものは、最初の招待客が招きを断ったために、次に貧しい人々があたかも「補欠として」招待されたという筋書きになっているが、これはむしろ、主人の招きの徹底性を示す表現であり、第一の招きと第二の招きとの間に優劣はつけられておらず、両者は実質的に並列関係にある⁴⁰。

この譬えはその後、Q 資料、さらにはルカ版 Q 資料へと伝承されていく過程において、第三の招きについて述べる 22-23 節、最後の結びの 24 節が付加されていく。ここでは、無理やりにでも人を連れて来て宴会場を満杯にしないという主人の僕に対する命令や、最初の招待客は誰も宴会に参加できないという主人の結びの言葉からも明らかなように、招待を断ることに対する警告とともに、今、招きを受け入れることを決断するようにとの要求が一層強められている。

39 小林信雄「『盛大な晩餐』の譬」『神学研究』（関西学院大学神学研究会）第 30 号、1982 年、26 頁。

40 同書、26-27 頁。

最後に、この伝承を受け取った福音書記者ルカは、冒頭の 15 節を編集的に構成し、第二の招待客を貧しい者らの社会的弱者に同定し (V. 21)、さらには、結びの言葉の語り手を主人からイエスに移行させている (V. 24)。まずルカは、15 節を付加することによって、この譬えを先行する段落と結びつけると同時に、ファリサイ派の議員によって催された宴会 (14:1) の文脈の中に位置づけている。その意味では、この譬えの直接の聞き手は、イエスを招いたファリサイ派の人物と、15 節でイエスに語りかけた者を含めた宴会出席者ということになるだろう。そして、第二の招待客を貧しい者らの社会的弱者に特定することにより、第一、第二、第三の計 3 組の招待客のグループが、それぞれ総じて、ユダヤ人指導者層、社会的弱者、異邦人に対応していることを暗示し、ユダヤ人指導者層が神の招きを断ったのに対し、招きの対象は社会的弱者、さらには異邦人にまで広げられていく救済史的観点をルカは鮮明に打ち出している。さらには、最後の結びの言葉の語り手をイエスに移行させることにより、ルカはこの譬えで語られている宴会の終末論的観点を強調するとともに、招きを断った最初の招待客たちが締め出されることを一層強調しているのである。

結び

イエスが語った元来の大宴会の譬えにおいては、神のよる宴会への招きの実行が主題になっており、招きを受け入れる者に対する神の恵みが強調されていた。しかし、現行のルカのテキストにおいては、神の招きを受け入れなかった最初の招待客の締め出しがむしろ強調されており、敵対者に対する警告が前面に出てきている。ルカは、ファリサイ派に代表されるユダヤ教指導層、ひいては神の招きを受け入れようとしない同時代人に対する警告の意図をもって、このテキストを構成したのであろう。